

ころ日記

「 ぼちぼち 」

自殺？

脇野 千恵

はじめに

中学校の教員をしています。思春期の子どもたちを相手に、翻弄される毎日を送っています。教師はキツイ仕事だと言われますが、私はあまりそのように感じたことはありません。日々心身ともに成長してく子どもの姿をみるのが、何よりの楽しみでもあります。子どもたちといると、色々な発見をします。特に思春期の子どもたちは、本当におもしろい。飽きることはありません。

そんなどこにでもある中学校の日々の暮らしを伝えていけたらと思っています。どうぞ、よろしくお願いします。

自殺？

子どもの変化を捉えるには、色んな目を持っていなければなりません。

私の学校では毎日、「ライフ」という担任との日記のやりとりをしています。30人以上いる学級の子どもたち一人ひとりの会話はなかなかできません。この「ライフ」は、子どもと担任との大切なコミュニケーションの場となっています。

担任は、毎日の空き時間は専らその返事を書くことに当てています。子どものつぶやきは様々ですが、そこで思わぬ問題に気がつくことがあります。

1学期の6月のこと。1年生は、性教育で「生命誕生」の学習をしました。その

学習後の感想で、こんなことを書いた子がいました。

「わたしの母は、不倫をしています。夜遅くに帰ってきたりしています。私はそんなことをしている母をどうしても、許すことができません。どうしたらいいでしょうか？」

無記名での感想文なので、誰かもわからず、担任は字体から色々な生徒の顔を思い浮かべました。すぐに教育相談担当である私にうち明けてくれた担任は、

「本当にお母さんが不倫しているとしたら、とてもひどい話ですねえ。何とかしたいけれど、誰かわからないし…。でも、母親が不倫してるんですか？」

「思い当たる子はいないの？」

「おそらくあの子だと思うけれど…」

思い当たるA子は、学級委員を務め、生徒会活動にも積極的に参加し、日頃の学校生活の中では欠点が見えない程、よくできた生徒です。担任は、そのことを気にしながらも、多忙な仕事の中でいつの間にか忘れてしまっていました。

やがて秋も深まったある日、いつものようにライフを見ていた担任が、何気なく、たまたまA子のライフの後ろページをめくった時、あるページ一杯に書かれた文章を発見しました。そこには、

「母親の不倫のことで、父と母のけんかがひどくなってきました。最近では離婚の話が出たりして。私はどうしたらいいのか、毎日死ぬことばかり考えています。私なんかもう死んでし

まえばいい。いなくなればいい。死にたい。死にたい」

といったものでした。

ちょうどその頃、新聞で小学生の自殺の記事が紙面を賑わしていました。例のごとく校長の“いじめなど無かったと認識しています。本人はとてもいい子でした”といった記事に、またか！とつぶやく私でしたが。

そのA子の「ライフ」の日記は、夏休み明けの日付でした。担任は、長い間そのことに気がついてやれなかったと、自分を責めていました。

「やっぱりあの子でした。全然気がつかなかった…。先生、どうしよう？」

「まっ、今、生きてるんやから大丈夫ちゃう。」

このことは、私と担任だけの問題にとどめておくわけにはいきません。中学校は、何でも生徒指導担当に報告するというシステムになっています。業界用語の“ホウレンソウ”。報告・連絡・相談を徹底することで、学校の荒れを防ぐ基本になっています。

当然この「死にたい」というA子のことは、生徒指導部会でも報告され、色々議論されました。校長は子どもの自殺があつては大変と躍起になっていましたので、親にその事をいち早く伝えろと結論づけました。もしも子どもが…そんなことがあれば学校として大変な事態になる！学校の責任は？記者会見での謝罪の言葉をどうするかといったことを思い浮かべたに違いありません。

担任から相談された私は、とにかく生徒との教育相談時に、A子の口からその話題が出るように、じっくり話をしてみてもいいか？というアドバイスをしました。

中学校では、担任以外のフリーという何かの時にすぐに動ける補助役としての教員が結構います。私は現在そのフリーの役をしていますが、問題が起きた時の生徒指導や不登校対応、家庭訪問、親対応など複数で動くことが多いので、ベテラン教員が配置されています。

自殺を未然に防ぐことに全力を尽くせという管理職命令に、担任もフリーも頭を悩ませていました。

A子と担任との面談の日、職員室でその結果をきくべく待っていると、

「先生、泣きながらうち明けてくれましたあ。でも辛くって…。やっぱり死にたいっていうのは、どうもお母さんの不倫が原因らしいんです。」

「じゃあ、その事をどうやって親に伝える？」

これはとってもデリケートな問題です。子どもが言う母親の不倫は本当なのでしょうか？

学年の教師達は、「母親の不倫」ということに大いに驚き騒ぎ、母親のふしだらさを強調して非難しました。また、校長は、「何とかやめられんのか、その不倫！」と息巻きます。しかし、婚姻関係にある者が、婚姻関係以外の人と恋愛するなど珍しいことではありません。

では、子どもが死にたいと訴えていることに、どう向き合うのか？

性教育で学習した「命を大切にしよう」という言葉は、何の助けにもならないなあと思いました。

A子は面談の中で、「死にたい」という思いを親に伝えることに初めは躊躇していましたが、担任の説得で伝えてもいいということ承諾しました。

さて、そのことをどのように親に連絡するのか？

「実はお母さんの不倫が原因で、死にたいゆうてるんです、って伝えるですかあ？」

「その伝え方は、まずいなあ」

と学年主任。

とりあえず、担任が最近のA子の様子が気になるといった要件で電話をし、学校に来てもらってはということになりました。母親は、察したのかすぐに何も聞かずに学校に来てくれました。

母親と担任と私との面談。私は密かに、うまくいけばA子を入れての面談を試みようとして計画していました。

「私達の離婚のことでしょうか？」

と母親は口を開きました。

A子の父親と母親は、家庭内別居状態が続いていました。父親のギャンブルと借金に苦しめられ、何度も夫に離婚を訴えましたが応じてもらえず、今は子どもたちのために我慢するしかないとのことでした。子どもが死にたいと訴えていることも冷静に聞いてくれました。涙ながらに話す母親に、

「ところで、お母さんには好きな人がいるんですか？」

とはなかなか聞けません。

「大変ですね。今、お母さんの悩みを相談する人はいるんですか？」と質問してみると、母親はいますと答えました。(やっぱり不倫だったんだ！)

一通りの母親の話のあと、A子を同席させました。母親を目の前にしてなかなか言葉が出ないA子に、

「お母さんに言いたいことはない？」と促しました。しばらくの沈黙のあと、A子は、

「お母さんとお父さんが、同じ家にいるのに話もしないし...子どもの私は一体どないしたらいいの！」と言うのが精一杯で、そのあとは大泣きでした。

その後母親は、実は父親とうまくいかない悩みを聞いてくれる人がいることをA子に打ち明けました。まだ父親とは離婚できないが、その人は苦しいお母さんを支えてくれる人なのだと説明しました。

「あんたがよう頑張ってること、お母さん知ってるで。生徒会もやってるし...。これから、お父さんと色々話していくけど、あんたのことは大事やと思てるよ。死なんといてや...。」

そんな母親の言葉に、A子は泣きながら頷くばかりでした。

そのやりとりを見ていた担任は、ぼろぼろと涙を流し始めました。その担任が泣いている姿を見て、今度は私も泣いてしまったのです。

親子が向き合えたこと。担任とA子親子が、不倫という事柄を理解し合えたこと。まさに家族の変容の瞬間でした。

このあと、親子は肩を並べて帰っていききました。

次の日、A子は担任に、その日の夜に母親と一緒に風呂に入ったことを報告しました。今A子は、何事もなかったように部活に生徒会にイキイキとした生活を送っています。

この親子面談は一回で終了しました。「親の不倫」と「子ども自殺」という言葉に湧いた職員室でしたが、その言葉に惑わされずに、子どもを理解しようと努力した担任。今後もA子からの信頼は揺るがないでしょう。

A子は、自分の家族に何が起きているのかをちゃんと知りたかったのだと思います。もやもやとした気持ちを、死にたいと訴えることで誰かに気づいてほしかったのでしょう。時間はたっていたけれど、そのことに気づけた大人がいたことは、本当によかったと思っています。

人はそう簡単には死なないというけれども、「死」を身近に感じられない子どもは、うっかりとそれを選んでしまうかも知れません。思春期の子どもたちは、よく死にたいと口に出して言います。本当のところはどうなのかといった判断を何で決めるのか、難しいなと思っています。

(中学校教員 脇野千恵)